Topos.（トポス） vol. 43
常磐大学学報
発行／学校法人 常磐大学　編集／常磐大学 企画広報課
茨城県水戸市見和一丁目430-1 TEL.029-232-2511（代）http://www.tokiwa.ac.jp/
TOKIWA　常磐大学大学院　常磐大学　常磐短期大学　常磐大学高等学校　常磐大学幼稚園
［2007.1.19］

国際社会・市民社会で貢献できる人材を育成する『中等教育学校』開設準備を推進

国際化が進む社会の要請に応える6年間の教育プロセス

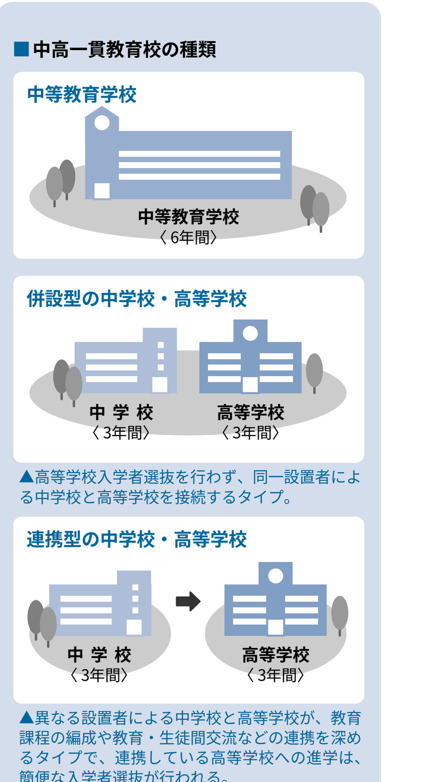
学校法人常磐大学は開学100年を経て、次の100年に向けた新たな取り組みのひとつとして『中等教育学校』の開設準備を進めている。新たに設置する中等教育学校では、主体的な判断力と問題解決能力を習得し、豊かな人間性や創造性、専門性をそなえた人材を育成することに取り組む。こうした教育目標の背景にあるものは、急速に進む国際化社会だ。異民族、異文化間での相互理解が求められる今日、国内はもちろん、海外でも活躍できる人材が求められている。そこで、グローバルな視点に立った『国際社会・市民社会で貢献できる人材の育成』を目的とした。6年間という長いスパンで先進的な教育を行う中等教育学校は、本県で最も新しい学校のタイプとして注目されている。本法人にとっては、幼稚園から大学院までの幅広い教育の機会を提供することにより地域の熱い期待に応え、更なる発展を期することになる。

カリキュラム編成の自由度が高い『中等教育学校』を開設

中高一貫教育とは、6年間の学校生活で計画的・継続的な教育指導を展開し、生徒の個性や創造性を伸ばすことを目的としている。そして、中高一貫教育には､「中等教育学校」「併設型」「連携型」の3つのタイプがあるが、本法人が設置を予定している「中等教育学校」は、一つの学校として、6年間一体的に中高一貫教育を実施するタイプである。このタイプは、カリキュラム編成等の自由度が最も高いもので、特色ある独自の教育を施すことができる。

2006年10月には、中等教育学校の設置計画について、茨城県知事から「計画適当である」と承認され、2008（平成20）年4月1日開校、入学定員120人規模（総定員720人）の予定で開設準備に取り組んでいる。

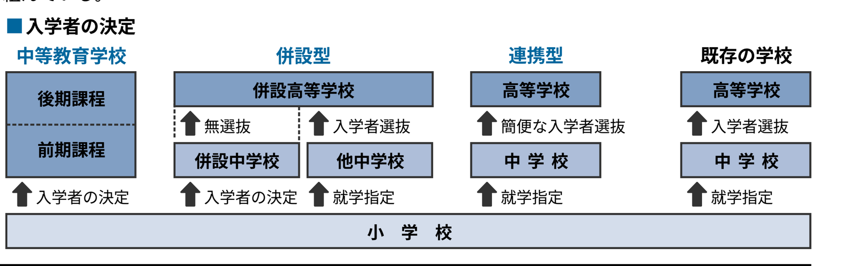
■中高一貫教育校の種類



▲高等学校入学者選抜を行わず、同一設置者による中学校と高等学校を接続するタイプ。（併設型）

▲異なる設置者による中学校と高等学校が、教育課程の編成や教育・生徒間交流などの連携を深めるタイプで、連携している高等学校への進学は、簡便な入学者選抜が行われる。（連携型）

■入学者の決定



TOKIWA TOPICS

■ 常磐短期大学創立40周年記念式典・記念事業報告

集う卒業生たちに常磐短期大学の歴史を実感

創立40周年記念式典で母校の発展を誓う

常磐短期大学は2006年、創立40周年を迎えた。それにともない、2006年10月4日『常磐短期大学創立40周年記念式典』が、水戸市のホテルレイクビュー水戸で開催された。出席したのは、常磐短期大学の卒業生を始め、教員・職員など関係者約220名。キャンパスで育んだそれぞれの思い出を胸に、母校のさらなる発展を誓った。

●創立40周年記念式典で挨拶をする諸澤英道理事長

式典は開式の辞に引き続き、学校法人常磐大学・諸澤英道理事長が挨拶。「多くの方の支援があって、本学の発展があったと実感している。今後とも教職員が一丸となり、社会で役立つ人材の育成に取り組みたい」と、今後の展開を感謝を込めて語った。来賓の茨城県副知事・川俣勝慶氏は「県としても、教育環境の充実を図る支援をしていきたい」と、祝辞を述べた。

記念式典の閉式後には、創立40周年記念品贈呈式が行われた。ステージに上がったのは、常磐短期大学同窓会『みわの会』会長の中﨑啓子氏。諸澤理事長に記念品の目録を手渡し、母校を支援する同窓会の意を表した。

次に行われたのが、プロのヴァイオリニストとピアニストを招いての『記念演奏会』。ヴァイオリン奏者の小林美恵氏とピアノ奏者の仲道祐子氏が奏でる美しい音楽に、参加者は、しばし時を忘れて楽しんでいた。

その後の祝賀会では、それぞれ思い出話や近況報告で和やかに歓談。40周年という節目に開催された記念式典は、次の10年、20年につながるイベントとして成功の内に幕を閉じた。

全卒業生を対象にホームカミングデーを開催

●当日は記念事業で作成した『諸澤みよ略伝』『常磐短期大学40年のあゆみ』を配布

創立40周年を迎えた常磐短期大学は、記念事業の一環として『ホームカミングデー』を2006年11月25日に開催した。卒業生全員を対象とするこのイベントには、190名を超える卒業生・退職教職員が参加。現職教員を含め約220名が会場に集まった。当日は、中原経子名誉教授による記念講演会を開催。創立者である諸澤みよ先生の孫にあたる中原先生が『日常生活にみる諸澤みよの生き方』をテーマに、貴重な資料から在りし日を振り返った。スライドで紹介される写真には開学当初のものも含まれており、映し出される映像に関係者は懐かし気に見入っていた。

講演後は昼食会を挟んで記念講座を開講。内容は、キャリア教養学科が佐藤啓子名誉教授の講演会、幼児教育保育学科が田中東亜子元助教授の折り紙講座、生活科学科生活科学専攻が多田牧子元非常勤講師のくみひも教室、食物栄養専攻が根本悦子非常勤講師の徳川家再現料理講座。卒業生たちは、ひととき学生に返って授業を楽しんでいた。

●大勢の卒業生が集まった記念昼食会

●中原経子名誉教授による記念講演会

●田中東亜子元助教授による記念講座「折り紙の楽しみ」

Tokiwa Interview ②

リカレント教育が向かう未来とは？

～「知のコモンズ」としての地域情報化～

高橋　潤二郎氏（学校法人 常磐大学 顧問）

教育機関としての大学・短大の役割は、学内での教育・研究活動が全てではない。地域に対する知的資源の開放も、重要な社会貢献のひとつ。常磐大学エクステンションセンターが実施する各種プログラムも、地域に生涯学習の場を提供する社会貢献の一環だ。そこで今回は、慶應義塾大学名誉教授であり、アカデミーヒルズの顧問を務める高橋潤二郎先生に『リカレント教育』の未来について語っていただいた。

「私は今後5年から10年ほどの間に、日本の歴史の中でも、ちょっと面白い時代がくると考えています。その要因のひとつは、インターネット世代の登場。物心ついたときからインターネットが普及していて、何の違和感もなくwebを使いこなす若者たちが社会に参加しはじめる。もうひとつは、団塊の世代の退職です。膨大な知を有する彼らが、有り余る時間を手に入れ社会に放出される」

加速度的に普及しているブログは、タイムコンシュームのメディア。時間的余裕と伝えるべき知を持った団塊の世代がwebと結び付けば、新しい知のネットワークが構築される。

「そこで“Google”が大きな役割を果たします。彼らの功績はいくつかありますが、最も注目したいのは、さまざまなコンテンツを無料で使用できるようにしたこと。メール、動画サイト、マップなど多くのコンテンツが、全部タダで利用できる時代が来たんです。これが意味するのは、これまでダウンロードするためにあったwebサイトが、アップロードするメディアへと進化したということ。つまり、非常に多種多様の人たちが、自分の知をネット上に開放することができるわけです」

主婦が家事のプロであるように、人は誰でもある分野の専門家。それが、一斉に喋り出すのだ。

「大学・短大が、さまざまなサイトが無料で提携しているメディアをオーガナイズしながら水戸周辺の人の知識をアップロードしてもらう。それを共同利用する時代が来たんだと思います。これは教育というより、むしろ『互学互習』ですね」

web上に、フリー百科事典“Wikipedia”というサイトがある。これは、誰でも自由に記事を投稿したり編集したりできる百科事典だ。

「“Kid's Wikipedia”を作るのも面白いですね。子供の目から見た政治や経済、また、いじめの問題なども取り上げる。大人の視点では捉えられなかった事実に、気付くかもしれません」

また、教員の研究成果を共有するため、パワーポイントの公開も提案している。

「パワーポイントは誰でも使用しているソフトですが、まだ共有するまでに至っていない。だから、教員が持っているパワーポイントをweb上にアップする。誰でもアクセスでき、修正できる環境を作れば、本当にユーザーオリエンテッドなコンテンツができるはずです。私はそれが『知のコモンズ（寄り合い地）』だと思います。これまでのリカレント教育は、教育という言葉にこだわり、知識を詰め込むことに偏重してきた。しかし、本当の教育とは知識を引き出すことです。地域の人たちがwebというツールで自分の知をアップロードし、互学互習のコモンズを作っていく。そこから、新しいリカレント教育が始まるのだと思います」

高橋先生のお話には、リカレント教育のあり方について、多くのヒントが隠されている。

Profile

たかはし・じゅんじろう●1936年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、同大学院経済学研究科博士課程修了。75年同大学経済学部教授、77年財団法人地域開発研究所所長を兼任。90年同大学環境情報学部教授。学部長補佐としてSFC創設に重責を担った。93年慶應義塾常任理事、2001年より同大学名誉教授。六本木ヒルズの文化施設「アカデミーヒルズ」顧問も務める。

FDフォーラム開催

学生と教員が自発的に考える組織的な授業改善への取り組み

第1回常磐大学FDフォーラム「大学の授業を考える」が、2006年9月14日、常磐大学FD委員会（委員長：コミュニティ振興学部・伊佐山忠志教授）の主催で開催された。会場には教職員約80名と学生約90名が出席。教員と学生がより良い授業展開などについて、共に考える有意義なフォーラムとなった。

まず始めに、早稲田大学教育・総合科学学術院教授の三尾忠男氏が「大学の授業を考える―いまなぜFDか」をテーマに講演。他大学で行われているFDの状況や授業評価の方法などについてご報告いただいた。

続いて、各学部を代表する教員と学生が、率直に話し合うシンポジウム形式のフォーラムに移り、人間科学部の渡邉孝憲教授、国際学部の依田泉教授、コミュニティ振興学部の塩雅之助教授の3名と、人間科学部の白井春菜さん、国際学部の関根謙一郎さん、コミュニティ振興学部の佐々木蓉子さんの3名の学生が登壇した。人間科学部・森山哲美教授の司会で進行されたフォーラムでは、教員たちが行っている授業に係わる工夫や悩み、学生から見た望ましい授業像など、普段はお互いに知る機会の少ない情報を交換。教員と学生が抱える問題の相違も浮き彫りとなった。

フォーラム終了後には、各学科に分かれて9つの分科会が開催された。ここでは、さらに活発な意見交換が行われ、参加者から「先生の考えが直接聞けた」「熱心に話し合えた」「教員も学生もコミュニケーションが大切」など、さまざまな感想が寄せられた。また「定期的に開催すべきである」や「分科会レベルでの意見交換をセメスターに1回は行うべきである」などの意見もあり、関心の高さを現わしていた。

今後の活動としては、当面は常磐大学FD委員会がコーディネーターとなり、モデル授業の公開や研究会の開催などが考えられている。こうした活動を通して、すべての教員が、授業改善に取り組み、教育力を向上させる努力をするような仕掛けづくりを行うことが目的だ。

しかし、これはあくまでもスタート。最終的には、各学科がひとつのチームとして、自発的に取り組むことが期待される。

第1回常磐大学FDフォーラム
「大学の授業を考える」

【参加者】170名（学生、教職員含む）
【登壇者】各学部代表の教員・学生各3名
教　員
■渡邉　孝憲（人間科学部教授）
■依田　泉　（国際学部教授）
■塩　雅之　（コミュニティ振興学部助教授）
学　生
■白井　春菜さん　（人間科学部 3年）
■関根　謙一郎さん（国際学部 4年）
■佐々木　蓉子さん（コミュニティ振興学部 4年）

＊FD（Faculty Development）とは―
教員の授業内容や教育方法などの改善・向上を目的とした組織的な取り組みの総称。

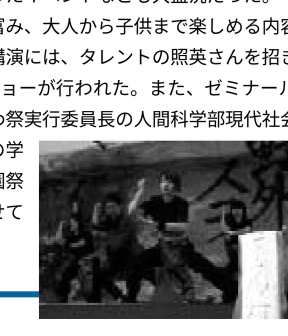
TOKIWA Campus Report キャンパスレポート

2006年ときわ祭開催

学生たちの日ごろの成果を地域に発表

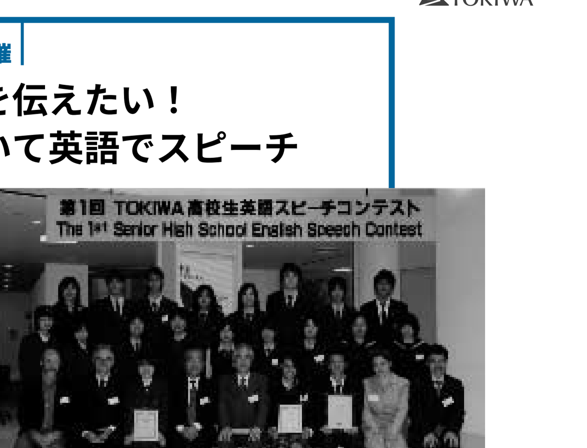
学生たちがアイデアにあふれた企画を出し合い、日ごろの成果を発表する『2006 ときわ祭』が、2006年10月28日、29日に行われた。テーマは『Re-born～つなぐ・むすぶ・キズナ』。生まれ変わったときわ祭で、来場していただく皆様の絆と絆を結びつけ、新たな絆を築いてほしいという願いが込められている。例年を上回る来場者が訪れ、野外ステージやグラウンドを使ったイベントなども大盛況だった。

今年の企画もバラエティーに富み、大人から子供まで楽しめる内容が盛り沢山。恒例となっている講演には、タレントの照英さんを招き『夢の実現』をテーマにトークショーが行われた。また、ゼミナールの発表も活発に行われた。ときわ祭実行委員長の人間科学部現代社会学科3年・木島佳貴さんは「この学園祭を、皆様の輪を取り持つ学園祭にしたいですね」と笑顔を覗かせていた。



第1回TOKIWA高校生英語スピーチコンテスト開催

世界共通語で、この熱き思いを伝えたい！高校生たちが行きたい国について英語でスピーチ



2006年10月21日『第1回TOKIWA高校生英語スピーチコンテスト』が、センターホールで行われた。このコンテストの目的は、高校生の国際的な視野の拡大と英語力の向上で、対象は茨城県及び隣接する県の高等学校に在籍し、英語を母語としない生徒である。当日は、県内外の高等学校7校から参加した21人の生徒たちが、演題の『行ってみたい海外の国』について1人4分以上5分以内で発表した。それぞれ自分が選んだ国の様子や行ってみたい理由などを、身ぶりも交えながら流暢な英語で語っていた。

審査基準として設定したのは内容（Content）、発音・アクセント（English）、発表力・態度（Delivery）の3項目。採点は4人の審査委員が各項目に点数を付け、高校生たちはその総合得点で順位を競った。

非常に僅差の戦いを制して優勝したのは、波崎柳川高等学校1年のド・アマラウ　ラリサ・リマさん。2位が東海高等学校3年の加藤隆生さん、3位に常磐大学高等学校3年の萩原湖珠恵さんが選ばれた。

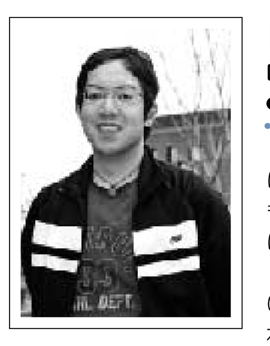
優勝したアマラウさんは「参加した皆さんがとても上手だったので、自分が1位に選ばれるなんて本当にビックリしました。将来は大使館に勤めて、祖国ブラジルと日本との架け橋になるような仕事をしていきたいですね」と、将来の夢を膨らませていた。

常磐大学では、アメリカのカリフォルニア州立大学ノースリッジ校とフレズノ校と交換留学協定を結び、相互に学生の派遣・受け入れを行っている。2004年度から始まった留学生の受け入れも今年で3年目。9月に交換留学生10名が到着し、秋セメスターの間、日本語や日本の文化、歴史などを学んでいる。以下、Daisuke Bunden君の留学体験記を紹介する。

外国留学生レポート

日本の社会を肌で感じながら学んでいます！

Daisuke Bunden君
●カリフォルニア州立大学 フレズノ校から留学



祖父は鹿児島からの移民で、私は日系三世にあたります。剣道七段の祖父から子どもの頃に剣道を習ったり、日本の文化や伝統についていろいろ聞かされていたので、日本にはとても興味がありました。フレズノ校では「犯罪学」を専攻しており、常磐大学は、犯罪学、特に「犯罪被害者学」の研究で有名なことを知り、今回の留学を希望しました。

常磐大学では週5日、日本語を学ぶ授業のほか、「犯罪学の日米比較」について研究しています。私は将来、警察関係の仕事をしたいと考えているので、街の中での犯罪が少ない日本の社会事情にはとても興味があります。水戸の街に住んでいると、市民がとてもフレンドリーで見知らぬ人にも親切にしてくれるし、大学でできた日本の友人も、授業から普段の生活まで親身になって手伝ってくれます。日本の社会が安全なのは、こうした人間関係を維持してきたお陰ではないか、と考えています。週末には常磐大学の友人たちと浅草や秋葉原に行ったり、「河口湖マラソン」を体験したり、すでに数え切れないくらいの思い出が作れました。帰国するまで残りの時間はあとわずかですが、思い出の数はまだまだ増えていきそうです。

高等学校通信

異文化に触れたカナダ短期語学留学 本年度参加の生徒8名帰国

●常磐大学高等学校 短期語学留学生派遣

常磐大学高等学校では9月から11月の3か月間にわたり、カナダ・アルバータ州エドモントン市にあるHarry Ainlay High Schoolでの短期語学留学を行った。本年度この留学に参加したのは3年生2名、2年生6名の計8名。エドモントン公立学校教育委員会のインターナショナルプログラムの協力を得て選定した高校に通い、英語研修プログラムだけでなく、各自が自分の興味や英語力にあわせて科目を選び、現地や各国から集まった高校生らと一緒の授業を受けた。現地でホームステイを受け入れてくれたのは教師や医療事務員、教育委員会秘書、電気技師など様々な職業の方々。

加えてカナダのすばらしい環境の中、とても有意義な体験をしたようだ。参加者の一人、2年の武子さんは「行くまでは色々な不安がありましたが、いざ行ってみると一日一日が充実していて月日のたつのが早かった」と振り返る。「美容師を目指す人たちがたくさん学んでいた“コスメトロジー”の授業は、マネキンの髪にパーマの加工をしたり、実際に友達同士の髪の毛を洗ったりして、将来の進路として、いくつかの授業を選択できるのが魅力的」と語る。また、2年の櫻井さんも「時間ごとに生徒が教室を移動するので授業が終わるたびに通路は大混雑。でも、色々な教科でたくさんの友達にも会えるのでこの仕組みは好きです」と学校生活にも満足したようだ。2年の加部東君は「授業移動には地図が必需品。階段はないけど敷地が広く相当歩くので運動にもなる。のびのびした環境は健康にも良かった。ハロウイーンの時のコスチュームコンテストは僕たち以外の留学生も参加して色々な服装をして、すごく盛り上がり楽しかった」と、日本ではあまりなじみのない体験に異文化を感じたようだ。「カナダ人の親切心を肌で感じた」と語るのは2年の柏さん。「はじめてバスに乗ったとき、自分がどこにいるのかわからなくなった。アドレスのメモだけもっている私の片言の英語に真剣に耳を傾けわかりやすく教えてくれた運転手さんに、とても感謝しています。それと、留学生は私たち以外にもたくさんいて、ほとんどの人が流暢な英語を話していました。同じ年齢なのに将来のこともきちんと考えていて、尊敬すると同時に今の自分との違いにとまどいました。今まで以上に将来のことを真剣に考えるようになりました」と大きな気付きを感じたようだ。

参加者の感想はつきないが、8名の笑顔には大きな自信がうかがえる。この3か月で得た体験を今後の生活に生かし、国際社会に臆することのない姿勢を持って常磐に新風を吹かせてほしい。

TOKIWA UNIVERSITY HIGHSCHOOL

学生支援センター　キャリア支援担当から

●就職状況について

景気の回復に伴い、企業の採用意欲は高まっている。常磐大学・常磐短期大学における2006年度学生の内定状況は、学部学科により多少ばらつきがあるものの、前年同期と比べると若干上回っている状況である。内定者の多くは、地元金融機関、卸・小売業の他、幅の広い業種に分散している。

11月からは大学3年生、短大1年生の就職活動がいよいよ本格化した。売り手市場とはいえ企業の厳選採用の姿勢は強く、会社説明会も早くなっている。大学3年生、短大1年生を対象に、業界研究、エントリーシートの書き方、バスツアーの事前説明会、マナー講座、公務員ガイダンス、ナビの使い方等を連日にわたって開催しており、学生の意欲も高まっているようだ。12月は東京ビッグサイトで行われる会社説明会に参加するバスツアー、内定者報告会、面接講座等を実施した。

●低学年向けキャリア支援対策について

9月からは1・2年生を対象としたキャリア支援対策の一環として、「あなたは、今どこにいますか」、「先輩に聞こう！働くって何～本学卒業生によるパネルディスカッション」と題し講座等をスタートし、2回実施した。さらに、12月には常磐大学出身のプロ野球選手2名による講演会を開催した（詳細は次号で報告）。また、2007年4月以降は、1・2年生のうちから数多く参加出来るキャリア支援プログラムを考え、実施していこうと計画している。

＊学生支援センター・キャリア支援担当の詳しい活動内容は、下記ホームページを参照してください。
http://www.tokiwa.ac.jp/~career/index.html

常磐フォーラム開催

●ビジネス戦略としてのファッション

『第10回常磐フォーラム』が、2006年10月11日水戸京成ホテルで開催された。このフォーラムの目的は、地域社会と大学との相互理解を促進し結びつきを深めること。今年も常磐大学・短期大学関係者と県内企業の人事担当者ら約250人が出席した。

講演を行ったのは、イメージングディレクターの高橋みどりさん。高橋さんは法政大学を卒業後、テレビ朝日のレポーターとして活躍。その後、ジョルジオ・アルマーニなどで広報やマーケティングなどを担当し、2005年、Oens（オーエンス）を設立。マーケティングや店舗プロデュースなど幅広く活躍する人物だ。

講演のテーマは『今後の企業にとって“イメージング”の重要性』。会場に集まった企業関係者は「知的で清潔感のある装いがビジネスに役立つ」という高橋さんの言葉に、熱心に耳を傾けていた。

講演終了後に行われたのは、人間科学部・伊東昌子ゼミナールに所属する人間科学部現代社会学科3年の藤崎操さん、同心理教育学科3年の本夛陽子さんによるプレゼンテーション。『利用文脈を重視した使い勝手研究とその利点』をテーマに、「モノ」はどこで、誰がどのように使うのかなどに配慮し、使い勝手を重視することで、危険や間違いのないスムーズな使用が可能になる、と具体例をあげながら解説した。その堂々とした発表に、会場からは大きな拍手が送られた。

卒業生センター便り

人間科学部5期卒業生ホームカミングデー開催

2006年9月30日14時から、常磐大学見和キャンパスにおいて、卒業後15年を迎えた常磐大学人間科学部5期卒業生を対象としたホームカミングデーを開催しました。卒業生17名、現・元教員10名の方々がご参加くださいました。「大学の変遷と卒業生の活躍」をテーマに実施したパネルトークでは、教員および卒業生をパネリストにお迎えして、活躍する卒業生からみるこれからの常磐大学について意見交換を行ない、「親しみのわく、アットホームな雰囲気の中、学生・卒業生を巻き込んでいってくれる大学となってほしい」、「知の財産を広く活用した、卒業生や近隣の方々も交流しやすい大学となってほしい」といった意見をいただきました。懇親会では、参加者の方々に近況報告を行なってもらうなど、卒業生・教員ともに親交を深めていました。終始アットホームな雰囲気の中、盛会のうちに閉会しました。別れを惜しみ、再会を誓う光景を目の当たりにし、「ホームカミングデー」を通じて、旧友・恩師、そして母校との絆を深めていただけたことと、心から嬉しく思います。

また、常磐短期大学創立40周年記念ホームカミングデーを11月25日に開催しました。詳細は2面に掲載しています。

【次回ホームカミングデー開催予告】
高校：常磐大学高等学校2002年度卒業生を対象
2007年2月3日（土）
詳細については、順次ホームページに掲載いたします。対象者には、案内状を後日送付いたします。

常磐短期大学同窓会

「みわの会」活動報告 大成功のホームカミングデー

短大創立40周年を記念して2006年11月25日にホームカミングデーが開催されました。

当日は、みわの会の総会を織り交ぜ、中原経子先生による講演会、昼食会、各学科に分かれ講師をお招きしてのイベントが行われました。

中原先生の講演会では、学園創設者諸澤みよ先生が苦境を乗り越え私財をなげうち、信念を持って教育活動に身を投じられた生涯を拝聴し、他人にも、そして、なお一層自分にも厳しかったみよ先生を想い、身の引き締まる思いがいたしました。昼食会では、久しぶりの再会や、初めて顔をあわせた同窓生同士が話に花を咲かせ、退職された先生方や現職の先生方ともにぎやかな時を過ごすことができました。午後の部の学科別記念講座には、佐藤啓子先生、田中東亜子先生、多田牧子先生、根本悦子先生を講師としてお招きし、有意義な時間を過ごすことができました。

今回のホームカミングデーは、短大として始めての試みでした。たくさんの卒業生の方々にご参加いただき本当にありがとうございました。そして、当日と開催までの準備等で多大なご尽力をいただいた卒業生センターの皆様にも感謝申し上げます。

【学位授与式・卒業式・修了式の日程】
※時間は変更になる場合もあります。

学校名	日　程	時　間※	場　所
常磐大学大学院	2007年 3月20日（火）	12:30～13:00	常磐大学
常磐大学		10:00～11:30	
常磐短期大学		13:30～14:40	
常磐大学高等学校	3月1日（木）	10:00～11:30	
常磐大学幼稚園	3月15日（木）	10:00～11:20	常磐大学幼稚園

常磐大学大学院・常磐大学・常磐短期大学の修了生・卒業生の皆さんには、3月初旬に、別途ハガキにて詳細をお知らせします。なお、卒業認定発表は3月7日（水）ですので、各自大学の掲示板を確認してください。

【お知らせ】
●2006年秋の叙勲で、薮　忠綱氏［元特命全権大使（元常磐大学国際学部教授）］が瑞宝中綬章を受章されました。
●教育再生会議（安倍晋三内閣の最重要課題である教育再生を検討するため、2006年10月に首相官邸に作られた）の委員に、川勝平太氏［国際日本文化研究センター教授（学校法人常磐大学評議員）］が選任されました。

編集後記

昨年は、常磐短期大学創立40周年記念事業が数多く行われました。その中でも、特に記憶に残っているのが記念式典とホームカミングデー。たくさんの卒業生の皆様に支えられて今日があることを実感し、身の引き締まる思いです。学校法人常磐大学では、卒業生センターや同窓会館の運営などを通し、卒業生への支援にも取り組んでいます。